



2025 年度の防衛装備庁「安全保障技術研究推進制度」の応募・採択結果 新たに補助事業制度を新設した結果、大学・研究所からの応募が大幅に増加！

防衛装備庁は 9 月 9 日、防衛分野での研究開発につながる「安全保障技術研究推進制度」(防衛省ファンディング) の採択結果を公表しました。

2025 年度の実応募数は前年度比 1.7 倍の 340 件に増加し、特に大学からの実応募数が前年度比で約 2.8 倍に激増しました。採択数は過去最高の 49 件（前年度比約 2 倍）になりました。表は、防衛装備庁の安全保障技術研究推進制度の 2015 年から 2025 年度までの実応募、採択、分担件数の推移です。

表 安全保障技術研究推進制度実応募・採択・分担件数の推移

	大学等			公的研究機関			企業等			総計		
年度	実応募	採択	分担	実応募	採択	分担	実応募	採択	分担	実応募	採択	分担
2015	58	4		22	3		29	2		109	9	
2016	23	5		11	2		10	3		44	10	
2017	22	0	5	27	5		55	9		104	14	5
2018	12	3	2	12	7	3	49	9	9	73	19	14
2019	9	3	1	33	7	3	59	11	13	145	26	17
2020	9	2	1	40	10	1	71	9	8	120	21	10
2021	12	5	2	30	4	4	49	16	8	91	25	14
2022	11	1	2	36	12	8	55	9	8	102	22	18
2023	23	5	2	27	8	3	69	10	6	119	23	11
2024	44	8	4	55	9	6	104	8	11	203	25	21
2025	123	20	16	83	25	11	134	4	14	340	49	41

分担：分担研究機関

大学関係の採択結果

大学からの実応募は前年度の 44 件から 123 件に、採択は 8 件から 20 件へと激増しました。防衛省ファンディングは 2015 年にスタートし、2024 年度までは、大学の実応募件数は 8 件～40 数件で推移してきたところです。このような急激な増加は補助金制度が始まったことによるものですが、その背景に、最近の物価高騰で、人件費、物件費などの急上昇しているため、大学における教育、研究体制の維持が限界に達している深刻な状況があります。

採択された大学は 11 校になりました。

東京科学大学

東京科学大学は 2024 年に東京工大と東京医科歯科大学が統合して設立された国立大学です。

採択された研究課題は補助事業制度でタイプ S 相当が 2 件、「異種デバイスシステムをハイブリッド結合したテラヘルツセンサ」、「AI 駆動 AC ナノボア法の原理深化とスマート微生物計測法の創生」、タイプ C 相当が「感染制御のためのナノスパイク化高分子材料の創生」、「動的界面の水分子の解析に基づく低摩擦・防汚機能材料の創生」、「界面制御による光無線給電用高効率青色発光光電変換素子の実現」の 3 件です。

九州大学

九州大学が本制度に採択されたのは初めてで、いきなりタイプ D が 4 件採択されました。

具体的には、タイプ S 相当が「エキシトン工学に基づく新原理熱発生技術の創生」、「海中の物体把握のための高解像度 3 D センシング技術の研究」、「宇宙天気シミュレータによる地球天気—電離圏—磁気圏変動の解明」の 3 件、タイプ C 相当は「注低温域に対応した横型熱電変換モジュールの構造設計と高出力化に関する研究」の 1 件です。

その他の大学

東北大学と熊本大学が 2 件、北海道大学、北見工大、大阪公立大学、日本大学、北里大学、京都工芸繊維大学、芝浦大学が各々 1 件の採択になっています。



公的研究機関の採択結果

公的研究機関からの応募数は前年度の 55 件から 83 件へ約 1.5 倍化しました。採択数は 9 件から 25 件へと前年度比約 2.8 倍化と激増し、公的研究機関の採択率（採択数/応募数）が異常に高くなっています。

物質・材料研究機構

10 件が採択され、一機関として最大の採択件数になりました。

委託事業がタイプ A で 4 件、タイプ C で 2 件、補助事業がタイプ A 相当で 1 件、タイプ C 相当が 3 件の 10 件です。物質・材料研究機構の研究費は防衛省ファンディング漬けになっているのではと心配です。

産業技術総合研究所

産総研は 2022 年度から毎年 1~2 件の採択でしたが、今年度は委託事業で 2 件、補助事業制度で 4 件と 6 件も採択されました。

日本原子力研究開発機構

原研機構は「原子力の平和利用の原則」の建前から、防衛省ファンディングに手を出さないと思っていましたが、補助事業のタイプ A 相当で「材料のハイエントロピー化による耐照射性向上と放射線修復」の課題が採択されています。この研究テーマを採択した防衛装備庁は、核戦争を想定しての材料開発を期待しているのでしょうか？

農業・食品産業技術総合研究機構

初めて採択されました。委託事業のタイプ A で課題は「自在にウィルスを検知する人工分子作成プラットフォームの作成」です。ウィルス攻撃に備えるための防御技術の開発につながる研究ではないかと思われます。

その他の機関

他に、宇宙航空研究開発機構、理化学研究所、海上・港湾・航空技術研究所、量子科学技術研究開発機構、情報通信研究開発機構が採択されています。



民間企業等の採択結果

民間企業等からの応募件数は前年度の 104 件から 134 件へ約 1.3 倍化していますが、採択は 8 件から 4 件に半減し、採択率が大幅に下がりました。防衛装備庁は、民間企業より大学や公的研究機関の研究力に期待していることがうかがえます。



「防衛装備庁・安全保障技術研究推進制度」の補助事業制度とは

今年度の採択で注目すべきは、新たに始まった補助事業制度です。これは「防衛省の委託事業は受けにくい、補助金であれば受けやすい」という大学側の声に応えて、防衛装備庁が大学側の主体的な活動を建前的に認める制度です。

補助事業制度の公募要領には「研究成果の公表は制限されません」、「補助事業によって生じた特許権などの知的財産権は、補助事業者に帰属します」、「防衛省職員が研究内容に介入することはありません」、「研究の円滑な実施や予算の適正な執行を図る観点で進捗管理が行われますが、これは研究の内容に介入するためのものではありません」とか、委託事業制度に比べ、研究の自由を保障する制度であるかのように書かれています。

しかし、補助事業の公募要領には、この制度の目的が、「防衛省・自衛隊が、安全保障に関わる技術の優位性を維持・向上させるために、先進的な基礎研究を公募する制度です」とはっきりと書かれていることを見落としてはいけません。それ故、公募に係る研究テーマは委託事業と補助事業で共通になっています。補助事業においても、防衛装備庁が設定したタイプ S、A、C 相当の課題を選択しなければなりません。科研費のように研究者が自由にテーマを設定できません。

また、補助事業は大学や国立研究開発法人に所属の研究者を対象に研究を公募しています。公簿要領には「民間企業に所属の方は応募できません」と書かれています。大学や国立研究機関の研究者を誘い込むことをねらったものです。



KEK 九条の会「機構のガイドライン設定に懸念表明」

今回の防衛省ファンディングの採択はありませんでしたが、高エネ研機構も防衛省ファンディングへの応募を認めるガイドラインを設定しました。これに対して、KEK 九条の会は、機構長宛てに次のような主旨で「懸念表明」送りました。

「ガイドラインでは、『基礎・基盤研究であること、研

究成果が軍事研究の開発に直接使われる可能性はないと考えられ、実施した研究成果が本機構に帰属すること、研究成果について公表が妨げられないこと』などの条件が設定してあるが、防衛省ファンディングの公簿要領によれば、研究テーマそのものが防衛分野での将来における研究開発に資することが期待できるとして設定したものである。また、研究成果の自由な公表については保障がない。研究成果が将来軍事技術として使われる可能性について、関知しないという立場にたっており、科学者としての社会的責任を放棄している。KEK 平和宣言に反する。」(機構長宛ての主旨)

これは、2017 年の日本学術会議の「戦争を目的とする科学の研究は絶対に行わない」と声明に反しています。科学的成果が軍事目的に利用されることを拒否してきた戦後の科学者の理念に思い返しましょう。



無言館訪問

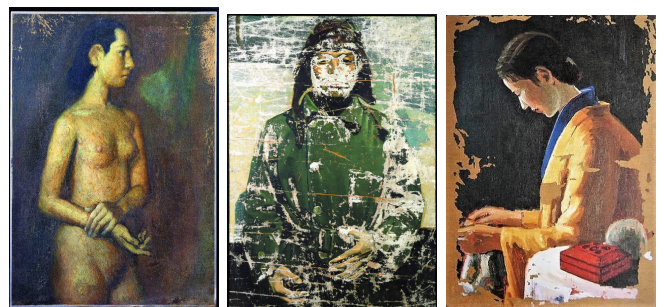
稲垣隆雄 (KEK 九条の会)

2025 年 5 月、新緑の無言館を訪ねた。上田電鉄のもより駅から 2.3 キロの上り路を歩いて登った。入口扉を開けるとすぐ、受付も何もなく、薄暗いコンクリート打ちっぱなしの展示室があり、そして、日高安典の清楚な裸婦画が目に入る。そこから、次々と、一度は目にしなかった作品が並んでいた。



無言館

興梠武の編み物をする婦人像は、大変な修復の後に蘇った作品と聞く。それでも補修しきれないで、外側に地色が残っている。それが、部屋に籠って一心に針仕事をする婦人の様子を強める効果生んでいる。ここにある作品の多くは、そんな修復努力を経て、今見ることが出来ているということだ。横顔や着物を照らす光、青い襟元、まさに、フェルメールの絵の様だ。モデルとなった妹は、武の戦死前に病死し、それを兵役中に聞いた彼は号泣したという。



小野春男の小さな屏風(枕屏風)「茄子」は、なす(茄子)の奔放な枝ぶりや葉の動きが生き生きと感じられる。対極の右隅に配置された女郎花の草の配置もいい。「早く兵役を終えて絵の世界へ帰りたい」という本人の言葉や、戦後に開かれた友人たちのしのぶ会に出席した父親で日本画家の小野竹喬が、「不意に自分の動脈をたちきられたようで、、、」という言葉を残したことを聞くと、悲痛な思いにさせられる。

大貝彌太郎の「少年飛行兵立像」は、その破損のひどさが、かえって、少年兵の表情を想像させる作品になっている。椎野修の「月夜の田園」は、予想以上に小さな作品だったが、静謐そのものの田園風景画だ。家族に告げず兵役につき、戻らなかった清水正道の日本画の「婦人像」、同じく静かに消息を絶った彫刻の千葉四郎の「母の座像」と「母の手」を見た。母の優しさが伝わるブロンズの小品である。左右を組んだ小さな手は、私自

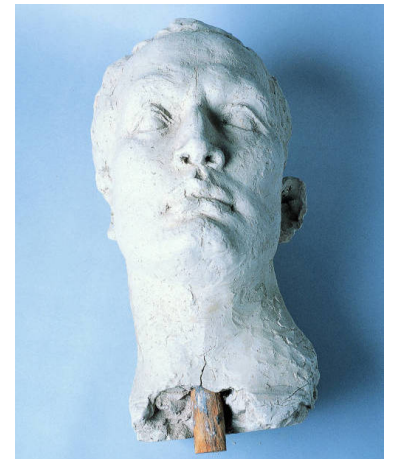
身の母の手を思い出させる。

片岡進の「自刻像」は、新館にあった。入隊の前夜に、一晩で作り上げたという塑像だ。木の棒の芯に石膏を塗り付けたものだ。肌はなめらかではない。正に絶作となるこの作品に、自画像でも、自己像でもない、自刻像と名づけた思いをくみ取りたい。実は、私はこれに一番会いたかった。上下左右から眺めて、鑑賞した。作者のものすごい気迫を感じることが出来た。

2.3 キロの坂道を登ってきたことと、季節外れの暑さで、ばててしまって、鑑賞は、1時間ほどで切り上げた。この旅は、高校時代の友人2人との旅であった。連休明けの信州1泊旅行でどこに行きたいかと問い合わせがあった時に、私は即「無言館」といった。そういうこともあったので、鑑賞後に、彼らの感想を聞いた。おおむね「暗くて重すぎる」というものであった。実は私は、旅行までの日々、無言館共同館主・窪島誠一郎氏の本数冊に目を通していた。それなしに、過酷な歩きを伴った鑑賞では、彼らの感想はもっともだと思われる。友人二人には、付き合ってくれたことへの感謝と、申し訳なさが残る。

無言館の作品は、2つのことを語っているように思える。一つは、もちろん、理不尽な戦争で、突然命を絶たれた才能ある若者たちを通して、こんなバカなことを2度と起こしてはならないというメッセージである。これは、窪島氏らが、行脚して、遺族方たちから作品を集める過程で語られた言葉としても残っている。そして、終戦時にはまだ幼児であった窪島氏に、この活動を始めさせた、生きて帰った同窓画学生の「仲間の無念さを残したいという思い」もある。戦争も終盤になると、戦況が悪化し、見境の無い動員がかかった。生きて帰ることも難しくなった。こんな馬鹿げたことが起こる戦争は2

度と起こしてはならない。反戦平和への切なる願いが聞こえる。



片岡 進：自刻像

だが私は、無言館の展示物は、もう一つ語っているように思う。それが端的に表れているのが、片岡進の「自刻像」である。自分が生きてきたあかしを、なんとしても残そうとする気持ちがこもっている。他にも、故郷の風景、母や妹、そして恋人を描く作品に現れた姿勢もまっすぐである。こういった 描きたいもの、残したいものを描くということが、芸術の原点ではないのかと、思ってしまう。切羽詰まった状況下で、このように原点に立ち返って創作されたことが、感動をもたらしている。この点で、最近、無言館の共同館主となられた内田也哉子氏のことを思う。彼女がナレーターをしている日曜8:55のEテレ「No Art, No Life」のタイトルの番組では、毎回、障害を持った作家たちが、ものすごい集中力で、素晴らしい作品をつくりあげ、芸術とは何かという問いへの答えを提供し続けている。内田也哉子さんは、その共通点に気付いて、共同館主になられたんじゃないだろうか？ 無言館の作品も、番組の作品も、個性あふれる人間の底力を示しているように、思う。



戦没画学生慰霊美術館 無言館 (長野県上田市)

第二次世界大戦で没した画学生たちの遺作、遺品、資料を収蔵、展示。戦没画学生たちが遺した「生きた証」を多くの人に伝え、次世代に残していこうとしている。

日本こそ核兵器禁止条約の先頭に！

原水爆禁止国民平和行進 2025

被曝80年の今年も、広島・長崎に向けて47都道府県をつなぐ「原水爆禁止国民平和行進2025」が行われました。6/26日に福島県から引き継いだ行進は、7/9日に千葉県に引き継がれました。

つくば市でも 2025年7月6日 (日) に「つくば平和行進」が行われました。



つくば市大清水公園での集会 (撮影：上原 満)

8:00 出発集会(大清水公園)
8:30 行進スタート
9:40 到着・交流(並木大橋)

土浦学園線から東大通りを南下する、
約4キロのコースです。



学園東大通りを南下 (竹園2丁目付近)

大清水公園での集会では、研学9条の会代表の手島さんから、会員任命拒否という暴挙を端緒として法人化へ押し切られた「学術会議法人化」をめぐる訴えがありました。

「核兵器といえば科学者が果たした役割が非常に大きいことはご存じの通りです。今回、学術会議法人化の法案が成立してしまいました。これで、もう日本の学術が終わりなのかというと、未だそうでもないんです。

あの法案には、新会員を選ぶ候補者選考委員には現行の会員も加わるので、政府の言うようにならないようにすることも抵抗するもできるもので、そのためには多くの市民の声を届け、会員、会長を勇気づける必要があります・・・」

